

マスターズを彩るレジェンドたち(10)

表紙は6月号だが季節は皐月の5月。鯉のぼりが勢い良く空に泳ぎ、風薫る候だ。野外スポーツに最も適した時節だが、新型コロナウイルス感染が収まる気配がなく、安心しての屋外活動どころではない。マスターズ陸上の会員の皆さんも身体のエネルギーを持て余しているはず。ここはしばらくは辛抱のしどころか。今月号は元に戻してマスターズ陸上を彩るレジェンドの続編を。

写真／川上明生さん、BBM

全日本マスターズ陸上に
40回連続出場で表彰された
川上明生さん(熊本)

熊本マスターズ連盟会長の川上明生さんが2019年に創立40周年を迎えた(公社)日本マスターズ陸上競技連合から、全日本マスターズ大会40回連続出場を達成したことで、特別表彰を受けた。84歳。川上さんが陸上を知ったのは、不惑の40歳のとき。それまでは陸上とは全くかわりがなかった。川上さんは船舶無線通信士として外国船舶に乗り、8年あまりを過ごした。「どれくらいの数、外国の港に寄港しましたかね。指を折っても、指が足りないほど」と振り返る。

その後、世界中を航行する船舶と通信するNTTの無線電報局に転職し、長崎の同局で定年まで勤め上げた。無線電報局に勤務していたとき、長崎県民体育大会に「40歳以上の100mの部」があることが分かり、やっていた軟式野球のほか、走ることに興味を持ち始めていたので「ぜひ走りたい」という気持ちを抱いた。

早速、近所に住んでいた諫早市陸協役員だった中村保徳さん(前長崎マスターズ連盟会長)にお願いして、諫早市代表として出場可能となった。川上さんのデビュー戦となった初めての100mは12秒0だった。世話人の中村さんは、早大時代に箱根駅伝で活躍した人物だ。

長崎県体の100mに出た後、陸上の練習に本腰を入れた。走り出してからあまり時間が経っていない時期に、書店で目にした『陸上競技マガジ

ン』で第1回全日本マスターズ選手権大会が和歌山市で行われることを知った。1980(昭和55)年のこと。

そこで100mと200mにエントリーした。大会当日はいずれも決勝に残ったものの、入賞には届かなかった。和歌山大会に参加したことを機に、長崎県でもマスターズの結成をと、先の中村さんに会長を引き受けてもらい、川上さんが初代の事務局長に就いた。

長崎マスターズを立ち上げて3年後の83年10月に第4回全日本マスターズを諫早市で開催し、成功させた。川上さんはこの後も全日本マスターズに挑み続けたが、2位は6回、4回出場したアジア・マスターズで3回あるものの「1位の壁」が厚かった。

そしてついに、92(平成4)年の第13回全日本マスターズ鳥取大会でM55クラスの200mで悲願の初優勝を遂げたのだ。タイムは25秒7。この記録はこの年のM55・200mでランキング1位となった。

「元船乗り、陸(おか)にあがった河童、陸(りく)を制す」の川上さんの心境は、本誌のマスターズのページで紹介された。

川上さんは48歳のときにローマであった第6回世界ベテランズ(現・マスターズ)の100m、200m、400mに出場。3種目とも準決勝止まりだったが、400mでは56秒14の自己ベストをマーク。この年には、100mで11秒8、200mで24秒6の自己最高が出せた。

定年後、郷里に戻った川上さんは年齢とともに、全日本マスターズで「勝

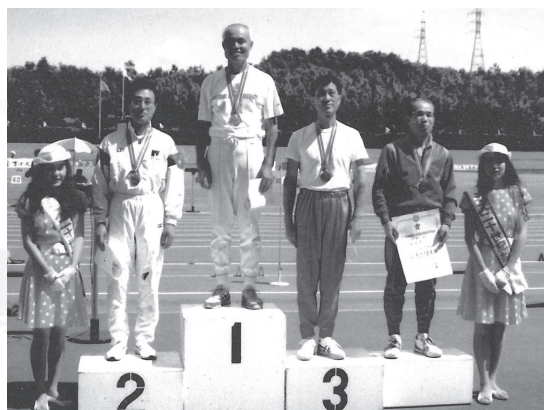


船乗りとして世界中を航海した経験を持つ川上さん。40歳から陸上を始め、40年間マスターズで活躍した。長崎のマスターズの立ち上げに尽力し、日本マスターズ連合のシンボルマークをデザインした

負や記録への挑戦はやめ、「楽しむ」をモットーに参加。2年前に40回出場で一区切りをつけた。

川上さんはタバコを吸わないのに、80歳になる前に肺がんが見つかり、右肺を3分の1切除した。だが、手術後も元気そのもので、全日本マスターズに参加を続けた。手術した後、体力を失わずに半年あまりで大会に参加できたことは「マスターズ陸上を続けてきたおかげ」と、マスターズ陸上への感謝の念を述べた。

熊本マスターズ会長として、組織のため、会員の皆さんのためにと力を注いでいる川上さんは「連続出場した40回大会で区切りをつけるか。それとも(マスターズ陸上を)続けるべきか、迷っている」そうだが、おそらく



第13回全日本マスターズ鳥取大会で悲願の優勝を遂げた川上さん

後者を選ぶだろう。

なお、84年には日本マスターズ陸上競技連合のシンボルマークでデザイン賞を受賞している。

昔取ったきねづかで よみがえった 渥美裕子さん(滋賀)

W75クラスの60m 9秒82、100m 16秒01（いずれも2018年）、立五段跳 8m93（19年）の3種目にマスターズ日本記録を持つ渥美裕子さん（滋賀）。マスターズを知ったのは1981（昭和56）年で38歳のときだった。

知人からマスターズの存在を教えられ「あなたも出てみたら」と勧められた。渥美さんがマスターズの会場に姿を見せたのは、2年後の83年だ。40歳だった。この年、神戸市王子競技場であった関西壮年大会のW40・100mで日本記録となる13秒6を出した。同じクラスでもう一人、渡川孝子さん（徳島）も13秒6を出し、二人が日本記録保持者となった。

渡川さんは2月号で紹介したように、渥美さんと同じ京都の光華女短大（現・京都光華女大）の出身。生年月日の関係で年齢は同じだが、同短大では渥美さんが渡川さんの1年先輩だった。

渥美さんの旧姓は塩尻。光華高（現・京都光華高）1年生のとき、58（昭和33）年に東京であった第3回アジア大会の日本代表として、200mに出場した。当時、渥美さんは15歳。日

本選手団のなかだけではなく、全競技を通じて最年少だった。

レースでは26秒3で3位に入り、メダルを胸にした。両親は滋賀師範（現・滋賀大）の出で教育一家。父親の安吉さんは高校教諭で、陸上部の顧問を長年務めた。その上、京都

陸協の理事長の要職まで。この父親の影響で渥美さんは幼い頃から陸上になじんだ。

光華学園の中・高・短大に通うようになった渥美さんは、中学生のときから頭角を現し、100mや200m、4×100mRで日本中学記録を何回もマークしている。中3では日本選手権の100mで6位入賞のほか、豪雨のなかを走った200mでは26秒8の日本中学新で3位に食い込んだ。

高1になるとアジア大会での活躍のほか、インターハイの100mで12秒3の大会新で1年生優勝を遂げた。各新聞は「11秒台も近い」と評した。秋の日本選手権では100m12秒6でタイトルを取り、200mは依田郁子選手（リッカー／2015年9月に掲載）に次ぐ2位となり、4×100mRでは光華クのアンカーとして、49秒7の大会新でゴールした。

このように活躍した渥美さんだった

が、高2の秋に生じた肉離れなどの故障が、以後の競技生活の命取りに。時は流れ、38歳でマスターズを知った渥美さんは、先述の通り40歳でトラックへ戻った。

1984年のベスト記録、100m13秒8、走幅跳 4m78はW40クラスのランキング1位に。85年に42歳で出た第6回全日本マスターズのW40・100m14秒4で3位、走幅跳 4m71で2位と2種目に上位入賞。この年の女子最優秀選手に選ばれたのが、渡川さんだ。

記念となった89年の和歌山市での10周年全日本マスターズのW45・100mでは14秒30の2位となった。渥美さんは次方を最後にマスターズから遠ざかる。子育てなど家事多忙が理由だった。

再び時が流れ、マスターズと縁が遠くなって26年ほど過ぎた頃の2016年に再びマスターズへ復帰した。復帰後の渥美さんは短距離のほか、立五段跳に力を注いだ。年齢は73歳になっていた。最初に述べたようにW75クラスの立五段跳で8m93をはじめ、60m 9秒82、100m16秒01の日本記録を。「体力を養うため」が信念の渥美さんは日々の食事にも気を配り、栄養に細心の注意を払っている。週2回は屋外での練習だけでなく、ジムに通い、マシンを使って、筋力の衰えを防ぐなどの心遣いを忘れない。さらなるマスターズ陸上への意欲がうかがえる。現在78歳。

光華高1年時にアジア大会200m3位、インターハイ100m優勝の渥美さん（旧姓・塩尻、前列左から2人目）。40歳でマスターズの世界に戻り、2016年に再優勝するなど陸上とかわり続けている

